

# 町史

とっておきの話

203

長岡・河井継之助記念館友の会会員  
高梁方谷会会員

小名 泰裕

司馬遼太郎書「壺中天」



## 河井継之助の矛盾

今回は、司馬遼太郎の揮毫『山水相應蒼龍窟』を紹介しました。今回はもう一つの揮毫『壺中天』について話します。私は、この揮毫を初めて見たとき、どういう意図で司馬さんが書いたのかよくわからなかったのです。

河井継之助は、長岡では郷土の英雄であり、その反面、起さずにくすむ戦をおこし、あげくの果てに町を焼き、負けた側に長岡藩を落としいれ、恨みをかいました。そのあたりを想いつつ『壺中天』のことを考えてみたいとおもいます。

百科事典(\*)でその意味を調べてみると、『俗世間とは異なつた天地、別世界のこと』と書いてあります。この意味と同様、只見の自然と風景が素晴らしいと司馬さんが言ったと思います。しかし、『壺中天』には、もうひとつの意味もあるのです。

司馬さんのエッセイに『風塵抄』という本があります。これは、晩年の司馬さんが毎月、サンケイ新聞に連載したコラムをまとめた本です。そのコラムの中に『壺中天』という章があります。そこから引用すると、

「自分だけの理想郷というすばらしく肯定的な意味と、きわめて狭小で手前勝手の見解という否定的な意味とをあわせ持っている」とあります。私は、この文章を読んだあと、思わず驚嘆しました。只見のこの『壺中天』の揮毫を私なりに解釈すると、

「藩政改革で長岡藩を理想的で近代的な藩にした肯定的な河井と、新政府軍（薩長）が決して受け入れることができない中立策を無理に押し通し戦争を起こした否定的な継之助」となります。

司馬さんは、河井継之助が茶毘に付された只見川の川原、今はダム湖の水面ですが、その場所を眺め、只見の風景と河井継之助のことを想っていたに違いありません。しかし、その心の奥底では、決して河井継之助のことをベタ褒めしていたわけではなかったのです。司馬さんが見た只見の風景と河井継之助のことを想う胸中は、意外と複雑だったのかもしれない。

『壺中天』と揮毫を書いた司馬さんのことを考えると、私は、『山水相應蒼龍窟』よりは、この『壺中天』の揮毫の方が、今は感慨深く思っています。今年の四月二十三日、長岡・河

井継之助記念館の主催で、司馬さんの『街道をゆく』の最後の担当記者であった村井重俊さんの講演がありました。講演が終ったあとの雑談で村井さんは、

『峠』という作品の前半は、きわめて合理的で理屈が通っているのだが、後半はまったくといっていいほど辻褄が合わなくなるという不思議な小説です」と話されていました。

私は、河井継之助がもつ矛盾、あるいは、『峠』という小説がもつ矛盾、その矛盾を矛盾として受け入れることができるかどうかで、河井継之助、『峠』の評価が変わってくるのだと思います。

司馬さんは『峠』の執筆後、六十里越国道が開通した翌年に只見に来られました。あれこれ考えると、司馬さんが『峠』を完結する前に只見に来ていたならば、只見で過ごした河井継之助の十二日間にもっとペーじを割いていたに違いありません。

『峠』のあとがきに、

「書き終えて、筆者もまた松蔵の恐れを自分の怖れとして多少感じている。いくらかの骨を灰の中にわすれてきてしまっているかもしれないのである」



長岡市・河井継之助記念館

と書いて、小説を終わっています。第四回と第五回で、只見の河井継之助記念館にある司馬遼太郎の揮毫を紹介しました。平成十九年、長岡・河井継之助記念館、開館一周年記念に、司馬遼太郎記念館の上村洋行館長が記念講演をされ講演のなかで、

「義兄の司馬遼太郎が『峠』を書いたほんとうの理由は、よくわからない」

と話されています。

結局、この『よくわからない』と言ったことを、私は楽しんでいくのかもしれない。

\*日本大百科全書（一九九五年二版）発行所：小学館